

進路指導実践事例

教員負担を軽減できる 外部専門家との連携

多岐にわたる外部連携が教員の負担を増やしている……そんな声が聞こえるなか、特定の専門家との連携によって教員の負担を軽減することに成功した事例をピックアップ。外部機関のよさを積極的に取り入れ、業務を思い切って任せたりすることで、教員、生徒がメリットを享受できている例を紹介します。

取材・文／永井ミカ

**校外との連携が
教員にとって大きな負担に**

下のグラフは2010年、全国の進路指導主事に「キャリア教育に対する考え」を聞いた結果である（複数回答）。キャリア教育は「生徒にとって有意義」と考えている一方で、実施については後ろ向きともとれる意見も増加し、特に「教員の負担は相当大きくなりそう」という不安の声は43%にも上った。

自由記述からは、「校外との連携が最大の問題点」「キャリア教育の幅が広すぎるうえ、校内の活動だけではおさまらずにほかの教育活動との並立が難しい。準備する余裕なし」「企業（実習先）の開拓、申し込み等の仕事量が非常に多い」「本校ではインターシシップなどを行うと良いと考えているが、受入れ企業探しや時期の調整などに相当の労力が必要」など、外部との連携による負担増加がうかがえる。それを緩和する方策として「授業とキャリア教育の専門指導者を分けるべき」という意見も上がっている。

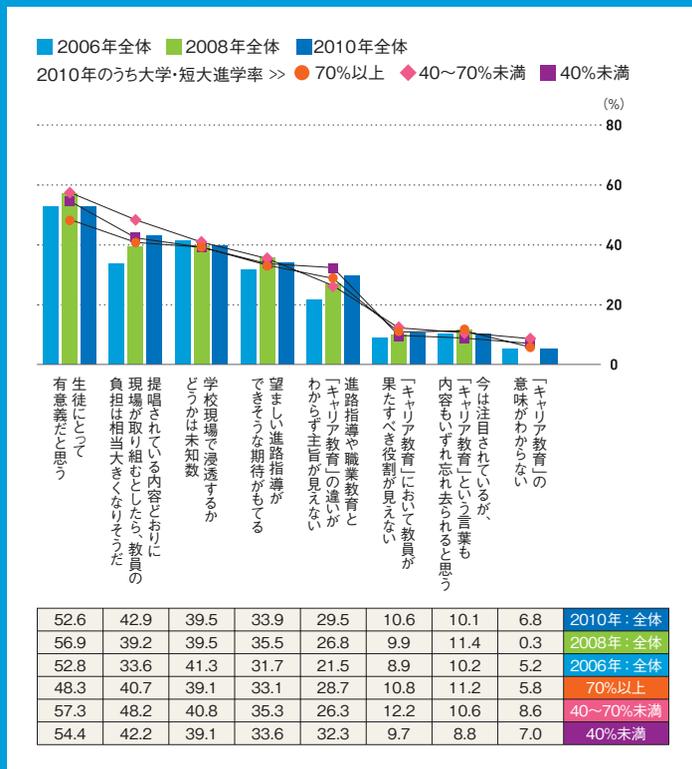
**外部人材、外部機関の
メリットを最大活用**

今回紹介する3校は、外部の専門家との連携によって教員の負担減に成功してい

る事例。外部コーディネーターやアドバイザーなどの専門家と連携し、彼らを通じてその他の様々な外部機関とつながっている。それぞれスタート時は新たな取り組みを始めるための労力を使ったが、一度信頼関係ができたと思いきつてかなりの部分を任せて教員の負担減を可能にしている。

事例1の西高校では「学校以外の社会経験のほとんどない教員が企業や社会について教えるより、それが得意な外部機関にお願いしたほうが有意義」とNPOの実績を評価。事例2の布施北高校も「外部人材や機関のスピーディな動きや客観的視点や学校の中にもち込んでほしい」と、多くの業務を外部人材に任せている。事例3の上富良野高校は、まずアドバイザーにプログラムの一部を実践してもらい、そこから教員も学んでいこうというスタイルをとった。

■ キャリア教育に対する考え



※ 弊社「2006年・2008年・2010年 高校の進路指導・キャリア教育に関する調査」より
(調査対象：全国の全日制高校の進路指導主事)

体験学習や講演をNPOに依頼することで 「奉仕」の授業をより充実したものに

— 東京・都立 西高校 —



守本昭彦先生



副校長
笹のぶえ先生

School Data

普通科 / 1937年創立
生徒数 / 1000人(男子528人、女子472人)
進路状況(2011年度実績) / 大学52%、短大0%、
専門学校0%、就職0%、その他(浪人)48%
東京都杉並区宮前4-21-32
TEL 03-3333-7771
URL <http://www.nishi-h.metro.tokyo.jp/>

高校とNPO団体の 役割の棲み分けが重要

東京都立高校では07年度より「奉仕」(1単位)が必修化され、18時間の体験活動も義務づけられている。都立西高校は「奉仕」が学校の目標である「リーダーとなる人材を育てるための教育」の一助となるよう、企業の社会的貢献活動や社会的弱者と呼ばれる人を理解するための授業に力を入れた独自のプログラムを作成。1年生で年間を通して学ばせることにした。東京都を通して、NPOスクール・アドバイズ・ネットワークに教育支援コーディネーターとして関わってもらい、プログラムの一部(表の青地の部分)を二任している。

この形になって3年の間に学校とNPOの中でいくつかの調整が行われてきた。例えば、8月の奉仕体験は生徒が近隣の様々な施設などに出向いてボランティア活動を行うものだが、当初はNPOに活動場所の確保などで協力してもらったことを検討していた。しかし、自主自律の精神に立ち返り、生徒が自分で体験場所・内容を決めアポイントをとることから始めることにしたため、学校のみで実施する項目とした。「できることは校内でやり、その分、NPOには外部との折衝が多いプログラムなどに力を注いでもらっています。特に6月の企業講演などはバラエティに富んだ人選から当日の仕切りまですべてお任せしているので助かります」と、昨年「奉仕」を担当した守本昭彦先生。企業講演

では8〜10人の講師に依頼するが、その謝礼もすべて一括の費用に含まれているため非常に効率がいいそうだ。車椅子体験やAED講習会なども外部機関との連携が必要なため、NPOに二任している。

担当者の変更がなかったため 教員の異動があっても安定運営

また、守本先生が「奉仕」の担当になったのは同校に異動してきてすぐのこと。前年度担当者からの引き継ぎ時間が限られているなかで、NPO側の担当者は変更がなく、全体の流れや担当分の内容を把握していたことは大きな助けとなった。「外部連携は1年めが大変ですが、まず

歩を踏み出してひとつのひな形を作ると、2年め以降は楽になります」と副校長の笹のぶえ先生は言う。

それはNPOの側も同じで、2年め以降は様々な動きがスムーズ。同校では東京都との連携を継続させてもらった。

「教員だけでやっていたら18時間の充実した体験学習を確保するのは難しかったでしょう。外部と連携することで教員は負担減となり、本来の仕事である教科指導や生徒指導に力を入れられます。また、社会経験が豊富な人たちにお任せすることでプログラムに幅ができ、生徒たちはより専門的な学習ができるなど、メリットは大きいと思います(笹先生)」

「奉仕」活動内容(2011年度)

月	日		
4	13	事前1	オリエンテーション
	20	事前2	説明会「奉仕活動体験(高尾山清掃)」
	27	事前3	ワーク 「自分の将来を考えてみよう」 「もし自分が地域や国のリーダーなら?」
5	2	体験1・2	高尾山清掃
	18	事前4	説明会「体験学習」
	25	事前5	講話「ボランティア活動」
6	29	事前6・7	企業による講演「社会貢献活動」
7	6	事前8	訪問内容練習
8		体験3~10	奉仕体験 8時間
9	7	事前9	障害者センターによる講話
	14	事前10	講話「災害ボランティア」
10	5	体験11・12	車椅子体験/ブラインドウォーク/AED講習会/応急処置講習会
	26	体験13・14	車椅子体験/ブラインドウォーク/AED講習会/応急処置講習会
11	2	事後1	ボランティアの日(奉仕体験活動の小論文)
	9	体験15・16	車椅子体験/ブラインドウォーク/AED講習会/応急処置講習会
	30	体験17・18	車椅子体験/ブラインドウォーク/AED講習会/応急処置講習会
12	14	事後2	奉仕体験活動まとめ・後輩へのアドバイス
	11	事後3・4	講話「起業する」
1	18	事後5・6	NPO法人をつくる1・2
	25	事後7	NPO法人をつくる3
2	15	事後8・9	NPO法人をつくる4・5(クラス内発表)
3	14	事後10・11	手話講習
	16	事後12・13	NPO法人をつくる6・7(クラス代表発表)

□ =NPO担当

親身になって生徒に対応してくれる支援員は 就職指導になくてはならない存在に

— 大阪・府立 布施北高校 —



教頭
中嶋義博先生

School Data

普通科(2013年度よりデュアル総合学科併置)／1978年創立
生徒数／626人(男子261人、女子365人)
進路状況(2011年度実績)／大学6.4%、短大8.5%、
専門学校13.1%、就職46.3%、その他25.7%
大阪府東大阪市荒本西1-2-72
TEL 06-6787-2666
URL <http://www.osaka-c.ed.jp/fusekita/>

就職活動が本格化する時期に 2人の就職支援員が勤務

大阪府立布施北高校は普通科として
は全国で初めてデュアルシステムを取り入
れた学校。05年度にデュアルシステム専門
コースを設け、週1回、年間約25回の実習
を地域の事業所などと連携して行ってい
るほか、来年度からは2クラスのデュアル
総合学科も設置する。

家庭環境や経済基盤、学力など様々な
課題を抱えた生徒があり進路未定者も少
なくない同校だが、10年度から11年度の
就職率は10ポイント上昇するなど進路実
績は向上した。その一端を担っているのが就
職支援員の存在。現在は2人の支援員が
おり、1人は、大阪府の事業により週平均
4日、1年間派遣されている。もう1人に
ついては以前は大阪府の事業で派遣され
ていたもの、現在は大阪府教育委員会の
「実践的キャリア教育・職業教育」支援事
業を受けて、学校の要望で継続。割り当て
られた事業予算の一部を人件費とし、年間
勤務日数を決める形で契約している。就
職活動が本格化する時期にはほぼ毎日勤
務してもらうなど、学校の動きに合わせて
スケジュールを組んでもらっている。

「結局、就職指導はどれだけいねいに個 別指導ができるかに尽きます。支援員は 学校「内」の外部人材

「結局、就職指導はどれだけいねいに個
別指導ができるかに尽きます。支援員は

就職指導だけに専念できるので、2人で
教員5〜6人分のパワー。特に何度か不採
用になった生徒は「もうフリーターでもい
い」という気持ちになりがちで、そういうと
きに親身になって個別指導してもらえ
るので助かっています」と言うのは教頭の中
嶋義博先生。生徒一人ひとりをいねいに
指導し可能性を伸ばす教育を目指す同
校だが、1対1の面接指導やそれぞれのレ
ベルに応じたマナー指導、個々の書類作成
などはとにかく人手が必要で、なかなか教
員だけでは満足できる手厚い指導がで
きないのが現実だ。

就職支援員は進路指導室にほぼ常駐
していることで、データ管理や資料にも詳
しくなり、週1回の進路部会にも出席し

ているため、教員も頼りにしている存在。
さらに、企業に勤めたことがある、ハローワ
ークに通ったことがある、などといった支援
員それぞれの社会経験も役に立っている
のだと言う。

「本当は教員もインターンシップなどの社
会経験を積んだほうがいい。けれどもなか
なか難しいので、教員の社会経験の少な
さをカバーするために外部の人材を大
いに活用すべきだと思います。また、教員
の負担を減らすためには、外部人材をゲ
スト扱いするのではなく、学校を理解して
もらい学校に入り込んでもらうこと」と中
嶋先生。支援員は生徒にも慕われている
存在で、名指しで進路指導室を訪れる生
徒も多いそうだ。

就職支援員の仕事

企業対応	職場見学予約
	不採用理由確認
	求人充足確認
	訪問(求人獲得のため)
生徒対応	面接練習
	職種、業種などのアドバイス
	職場見学同行
	採用試験報告書作成補助
	採用試験日の送り出し
	不採用理由の説明(今後の改善目標)
事務	職業マッチング(希望職がない生徒のため)
	職場見学のための書類作成
	採用試験のための書類作成
	生徒閲覧用求人票作成
	教職員用生徒受験一覧作成
	生徒配布書類作成(就職)
	保存資料作成(データベース入力、本年度就職結果など)
	生徒用求人資料作成(パンフレット、企業情報)
	事務処理提案
	来客対応(教職員不在の場合)
電話対応	

キャリアカウンセラーの協力を仰ぎ キャリア教育とカウンセリングを一本化

— 北海道・道立 上富良野高校 —



養護教諭
佐藤美千子先生

School Data

普通科 / 1948年創立
生徒数 / 95人(男子49人、女子46人)
進路状況(2011年度実績) / 大学0%、短大0%、
専門学校18.8%、就職56.2%、その他25.0%
北海道空知郡上富良野町東町3-1-3
TEL 0167-45-4447
URL <http://www.kamifurano.hokkaido-c.ed.jp/>

生徒も保護者も教員も
相談できるスーパーバイザー

各学年1学級の小規模校である北海道
上富良野高校は、3年前にKDSS(上
高ドリカムサポートシステム)を立ち上
げた。生徒の、自律を促し一人ひとりの夢
を実現させることを目的としながら、キャ
リア教育として進路学習や講話などを行
う(左表)。さらに、既存の特別支援組織
や教育相談分野も組み込み、進路の悩み
も含めた生徒の成長発達にかかわる様々
な問題も一本化して扱う。つまり、KDSS
は、表に表れていない各種相談や課題を抱
えた生徒への対応なども含めたシステム
の総称である。

KDSS実施計画(2012年度)

	1年	2年	3年
目標	①自己理解、他者理解(自分のアイデンティティを持ち、他者のアイデンティティも受け入れることができる)	①長所(得意)と短所(不得意)を説明できる。②自己の課題を明確化でき、それを克服するためにやるべきことをイメージ(説明)できる	①仕事を続けるために、必要な力や考え方を身につける。(就職活動や受験勉強の際の心構え)
4月	・進路全局面接 ・コミュニケーションを考える(行事、コミュニケーションワーク)	・進路全局面接 ・インターンシップの準備をすすめる。若者に求められる事。社会人としての常識・非常識を知る	・目指す職業を具体化し、それに就くための行動計画を考える。自己PRを考える
5月	・人間関係を考える。上手なコミュニケーションの取り方。断り方。集団生活でいやだと思った時にどのようにするか	・自己理解を深め、自身のコミュニケーションスタイルを理解し、他者理解に役立てる。エゴグラム	・ミスマッチを防ぐ話(仕事を選ぶ観点、会社の何を見るのか、求人票の何を見るのか)
6月	・宿泊研修を通して自身を振り返り、高校生活を考える	・職業デモ講習会、インターンシップ実施、インターンシップ発表で企業(含む進学先)を研究する	・実践的な就職活動のノウハウ取得。 ・公務員希望者集会
7月	・学校祭振り返り	・学校祭振り返り ・インターンシップ報告会	・学校祭を振り返り進路につなげる ・一般就職希望者集会
8月	進路全局面接		・就職・専門学校・大学推薦などの面接に関するレクチャー・面接する側から見た視点でのチェック
9月	・働く意義をお金があったら働くかという観点から考える	・長所と短所を考え、自己PR作成シートを作る	・面接練習、カウンセリング ・センター試験受験者集会
10月	・その職業に就くための手順も含めて職業を知る	・見学旅行に向けて、見る・感じる・調べる視点を学ぶ	・面接練習
11月	・職場見学会を行い、調べたものを自分の言葉でまとめる	・見学旅行で視野を広げ、振り返る	・進路決定後の生活の仕方
12月	・将来の理想の私、進路探しの理想像	・会社組織のしくみと役割を学び(コミュニケーションワークを含む)、社会の中の一員であることを強く意識させる	・カウンセリング
1月	進路全局面接		・これからの自分を考える ・センター試験事後指導集会
2月	・進路学習、ボランティアを通じて社会とつながり、人の役に立つという事を考える	・目指す職業の具体化、それに就くための行動計画	
3月	・1年間の振り返りと次年度への課題		

□ = キャリアカウンセラー担当

立ち上げ当時より株式会社日本マンパワーからキャリアカウンセラー(以下CC)を派遣してもらい、3年間、同じ人にスーパーバイザーとしてかわらぬという思いが「小さな町なので広い視野から進路を考えてほしい、生徒の抱える課題にできるだけ早く外部とつながりたいという願いがありました」と言うのは、KDSS担当の養護教諭・佐藤美千子先生。町からの援助も受け学校が契約し、年5〜6回の来校で講話など(表の青地の部分)を行ってらつている。来校日は生徒や保護者がカウンセリングを受けたり、教員が相談すること。また、生徒や保護者が学校に知られずにCCにメール相談することも随時可能だ。学校はCCを通じて様々な外部機

関とつながれるメリットもある。「3年かけて本校のスタイルが見えてきました」と佐藤先生。KDSS1年めは、CCに提案された年度計画を学校の動きに合わせて実施。教員対象に「傾聴スキルアップ研修」も依頼した。「教員がCCの講話を参観してスキルも学び、2年め以降は、外部機関が行うもの、外部機関から助言を得て担任や分掌が行うもの、担任や分掌が単独で行うもの、を考え組み入れていきました。現在では、学年からやりたい内容や改善点も上がってくるようになり、それを盛り込んだのが今年の実践内容(表)です」と佐藤先生。現在の課題は、これまでの2年間の実施をもとに3年間の流れを作ることだそうです。